

ナショナル・アイデンティティとしての「爆発」 ——ロシア・ポストモダン論のなかのユーリー・ロトマン

乗松 亨平

ソ連の終焉がその国民に、政治・経済的のみならず、文化・心理的にも巨大な断絶として経験されたことはいままでもない。いまになって振りかえれば、90年代にロシア文壇を賑わしたポストモダン論は、そんな断絶の衝撃に対する一種の治癒・代償行為であったようにみえる。当時、西側でも脚光を浴びたコンセプチュアリズム美術を中心とする現代ロシア文化が、「停滞」期のソ連体制の生み出した鬼子であり、かつ、最新のポストモダン文化であると称揚されることで、ソ連時代から現代へ、断絶を越えて連続性が見出されたのだ。ソ連がすでにポストモダンだったのであれば、なにも慌てふためく必要はない。

本稿は、ソ連終焉の前後を結びつけるそうした連続性の言説の一例として、ソ連記号論の泰斗ユーリー・ロトマン（1922-93）の、ロシア・ポストモダン論における参照について検討する。ロトマンはバフチンとともに、ポストモダン理論の先駆者という位置づけをしばしば与えられた。それはやはり治癒的效果をもつことだったろうが、単なる表面的な慰撫にはとどまらず、ロトマンのいくつかの重要な論点が、ポストモダン論に引き継がれたように思われる。2000年代に入ってロシア・ポストモダン論が遂げた変貌についても、ロトマンの参照をとおして考察できるだろう。

1. 観測問題とメタ言語

最初に述べておくと、ロトマンとポストモダン理論を関連させることは、まったく的外れというわけではない。たしかに、ロトマンと西側の文化理論との帯同は構造主義・記号論まででストップし、60年代末以降のポスト構造主義については、ブレジネフ期の抑圧で参照が制限されたというより、ある程度読んだうえで否定的評価を下していた。¹しかしロトマンは、その名声が最も高まった晩年の著作で、とりわけ理系の言説への関心において、西側のポストモダン理論と軌を一にすることとなる。ひとつは量子力学における観測問題、もうひとつはイリヤ・プリゴジンをはじめとするカオス理論への関心だ。周知のように、ポストモダン理論によるこれらの言説の参照は、のちにソーカルとブリクモンの

¹ 1978年2月23日付ナターリヤ・アフトノモヴァ宛ての書簡を参照。Автономова Н. Открытая структура: Якобсон - Бахтин - Лотман - Гаспаров. М., 2009. С. 469.

『知の欺瞞』により徹底的に不正確さをあげつらわれたが、ここで検証したいのは、むしろ参照の正確性などではなく（筆者にそんな力はない）、不正確を厭わぬ参照をさせた歴史性である。

観測問題への関心から検討しよう。『思考する諸世界のなかで』（英 1990／露 1999）の第3部でロトマンは、歴史学における「歴史的事実」とは何かを論じた。ヘイドン・ホワイトラに代表される歴史学の言語論的転回と平行し、〈歴史家が関係をもつのはテキストたらざるをえない。「生じたとおりの」出来事と歴史家のあいだにはテキストが挟まっている〉、〈解説とはつねに再構築である〉²と述べたうえで、次のように観測問題が言及される。

さまざまな学問領域で同じ問題がアクチュアルになっている——言語の問題、すなわち記述のメタ言語と記述対象との相互作用の問題である。[...] ルネサンス後に形成され、デカルトとニュートンの考えに基礎をおくような科学は、学者は外的な観察者で、おのれの対象を外から見ており、それゆえ絶対的な「客観的」知識を有するのだと前提していた。現代の学問はそれぞれの領域で——核物理学から言語学まで——、学者を記述される世界の内部、その世界の一部とみなしている。だが対象と観察者は、当然のこととして異なる言語で記述される。したがって、翻訳の問題が、学問的課題に普遍的なものとして生じるのだ。[386]

このようなロトマンの観測問題に関する理解を、まず、ロシア・ポストモダン論の代表者、ミハイル・エプシュテインと比較してみよう。彼は〈「最終的真理」というまさにこの幻影ゆえに近代主義を批判する〉³ものとしてポストモダニズムを規定し、観測問題を引きあいに出す。

言っておかねばならないが、この逆説は現代のポストモダニズムの理論家たちよりはるか先に、量子物理学において発見された。[観測] 機器が観測対象——素粒子——自体に影響を与えてしまうのだ。物理学者に開示される現実、1920-30年代以来、「ハイパーリアリティ」たる度合いを増す一方である [...] ⁴

現実を観察者がつくり出す「ハイパーリアリティ」と化し、記号は対応する現実をもたないシミュラクルと化す、というボードリヤールの主題が、エプシュテインの考えるポ

² Лотман Ю.М. Семиосфера. СПб., 2004. С. 336. 以下、同書からの引用は本文中に頁数を [] で示す。引用文中の強調は以下すべて原文、[] 内は引用者による。

³ Эпштейн М. Постмодерн в России. Литература и теория. М., 2000. С. 15.

⁴ Там же. С. 17.

ストモダンの中核である。彼によれば、〈共産主義世界では、同じ 1920-30 年代に、同様の「ハイパー化」のプロセスが社会生活のあらゆる領域に広がる。実のところ、共産主義そのもの、その理論と実践とを、東側に特有の「ハイパー」の現象とみなすことができるのだ〉。こうしてソ連はポストモダンの先駆とされ、さらに、〈シミュラクルの遍在、シニフィエの世界を覆い隠しそれにとって代わる記号システムの自的存在——それらはロシアにおいて、少なくともピョートル大帝時代から存在した。ロシアの「ハイパーリアリティ」の源泉は、西欧文化という他者の形式を急速にとり入れたプロセスに見出すことができる〉⁵ と、ロシアの近代全体がポストモダンの的であったと拡大される。

こうしたポストモダン論とロシア特殊論との結びつきについては後述するが、いまはロトマンに戻って、上に引用した文章を見直すと、観測問題が彼固有の問題意識に変換されているのが目につく。すなわち観測問題が、観察者の言語と対象の言語という、二つの言語の「翻訳の問題」として解釈されるのだ。対象がテキスト（資料）である歴史学ならまだしも、自然科学において「対象の言語」とは何を指すのかわかりにくいだが、ロトマンは『文化と爆発』（1992）で次のように書いている。

なにより知的活動の本性的なものが、翻訳という観点から記述できる。意味というものを定義するなら、それはある言語から別の言語への翻訳のことであり、その際、言語外の現実もまたある種の言語として考えられる。言語外の現実に対して、構造的組織性と、多様な表現セットの内容として現れる潜在的な可能性とが付与されるのだ。[17]

つまり、「生じたとおりの出来事」ではなくそれを記録したテキストを扱う歴史学と同様、あらゆる知的活動が対象とする現実には、言語的構造的性をもつと想定されるかぎりでの「現実」だということだ。

エプシュテインの観測問題の理解においては、対象の地位がほとんど無に帰している。『ハイパーリアリティ』たる度合いを増す一方の現実には、観察者の恣意により作りだされるかのようであり、オブジェクト・レベルは蒸発し、メタ・レベルしかなくなってしまふ。それに対してロトマンは、観測問題を「メタ言語と記述対象との相互作用」として捉えるのであり、彼がしばしば「翻訳」と平行して使った言葉になぞらえれば、二つの言語の「対話」として考えようとしている。対象とメタ言語との垂直的な階層構造が、二つの言語の水平的で対等な関係におきかえられるといってもよい。近似したイメージとして、バフチンのポリフォニー小説論における作者と登場人物の関係を思い出せよう。エプシュテインとは逆に、メタ・レベル（作者）がオブジェクト・レベル（登場人物）へ、すなわ

⁵ Там же. С. 26, 86.

ち「記述される世界の内部」へと、引きずり下ろされるのである。

エプシュテインに次ぐロシア・ポストモダニズムの論客だったヴァチエスラフ・クーリツィンは、ロトマンの「対話」への関心と観測問題を結びつけている。

上述の書き手たちの多くが、メタディスクールの試みを批判することに多大な注意を割いている […]

[...] 例えば Ю・М・ロトマンは、現代の言語状況を次のように特徴づける。「ひとつのきわめて完全な言語によるモデルが適正だという観念は、少なくとも二つ、事実上はいくらでも追加可能なさまざまな言語による構造というイメージに取って代わられる。それらの言語は単独では世界を表すことができないため、たがいにたがいを必要とするのである […]」⁶

ここではメタ言語の破綻という問題が、よりわかりやすいかたちで「対話」の問題に接続されている。単一のメタ言語では不完全なので、複数のメタ言語が要請されるというわけだ。ロトマンの引用は最後の著書である『文化と爆発』からだが、「少なくとも二つ」の記述言語の必要性という主張は、1969年の論文「テキストの構造的記述におけるいくつかの原理的困難について」にさかのぼる、ロトマンの基本原則のひとつである。このあとで、クーリツィンは量子力学を参照する。

[...] 時間の非線形的運動について語ることは、ある現象を記述するには少なくとも二つの「言語」が必要だ——上の Ю・М・ロトマンの引用を参照——という話と同じく、物理学的現実の理解における深刻な変化、量子力学（シュレーディンガー、ハイゼンベルク、ボーアの概念）のもたらした変化のあとで、可能になったことである。⁷

カオス理論に類する「非線形的運動」についてはあとで触れるとして、観測問題に関するこのような理解の差異は、エプシュテインとクーリツィンのポストモダン概念における重点の違いにつながっている。現実の「客観的」で「最終的」な記述が不可能になり、あらゆる「現実」像はつくりものの「ハイパーリアリティ」と化した、というエプシュテインの主張に対し、ロトマンに沿いつつ、クーリツィンが観測問題から引き出すのは、単一言語による現実の記述が不可能になったがゆえに、複数の記述言語が並立することになったという主張である。これは、「大きな物語」が崩壊し「小さな物語」が乱立する時代になった、というリオタールのなポストモダン理解に近いだろう。〈ポストモダニズムの時

⁶ Курицын В. Русский литературный постмодерн. М., 2000. С. 29.

⁷ Там же. С. 30.

代は「変化した意識状態」をコンセプトとする、ということにはごく納得がゆく。世界はわれわれに世界の記述として与えられる、この記述は非常に多数でありうる、そして変化した意識状態は、まさにこうした多様な記述の可能性を如実に示すのである。それこそが「ヴァーチャリティ」だ。クーリツィンが著書『ロシアの文学的ポストモダン』（2000）の末尾で述べる、〈真実などないと知ったいま、われわれは気軽に真実について語り、真実を唱道することができる。根本的にかりそめのものであるというその性質を理解し、いつでも好きなときに手放せるのだから〉⁸ という考えも、エプシュテインが強調する「最終的真実」の喪失という事態以上に、その結果として多数の「小さな真実」が出現したことをポジティブに捉えるものだ。一方で、ロトマンの観測問題の理解にみられたような、メタ的な階層構造そのものの破壊はクーリツィンには窺えない。メタ言語は複数化することで、その地位を保全するのである。

シミュラクルの蔓延と「大きな物語」の崩壊、この二つを比較してマルク・リポヴェツキーは、後者をポストモダンの根本要因とし、社会主義リアリズムをシミュラクルと捉えるエプシュテインに反論している。

エプシュテインの土俵にとどまるならば、ポストモダニズムはなによりシミュラクルがシミュラクルとして認識されることと結びついている。だがそれに反して社会主義リアリズムは、あらゆる正当化によって、その記号複合体の絶対的現実性を宗教的に信じさせるのだ。[…]
社会主義リアリズムの言説の内部において、シミュラクルというカテゴリーは作動していない。

[…]
慣れ親しんだ社会・文化的現実がシミュレーション的性質をもつという発見は、おそらく上述のこと、すなわち、文化的意識と文化的組織全体の非正当化と脱ヒエラルキー化の直接的結果である。[…]

[…ポストモダンの] 連鎖反応の口火を切ったのは、近代の大きな物語^{メタナラティブ}の非正当化だといわざるをえない。⁹

リポヴェツキーはクーリツィン同様、複数言語の「対話」——リポヴェツキーが多用する言葉にしたがえば間テクスト性——をポストモダンの第一特徴とみなすが、それをあくまで現実を記述するメタ言語の複数性と捉えていたクーリツィンと違い、次のように主張する。〈B・マクヘイルが示したように、ポストモダンの言説とモダンのそれとの最も重要

⁸ Там же. С. 127, 259.

⁹ Липовецкий М.Н. Русский постмодернизм. Очерки исторической поэтики. Екатеринбург, 1997. С. 120.

な差異は、モダニズムにおける認識論の優勢（私がどのように世界を見るか）が、存在論の優勢（世界はどのように構築されているか、世界とは何か）に変容することだ、〈ポストモダニズムはさらに先へと進み、現実とはさまざまな言語と言語的遊戯の組み合わせ、間テキストのまだらな織物にすぎないのだと示す〉。¹⁰ 世界はテキストであるというこの発想において、メタ・レベルはオブジェクト・レベルへと完全に引き下ろされる。

先述したように、ロトマンの観測問題の理解には同様の志向がみられたが、よりはっきりした類似性が窺えるのは、『思考する諸世界のなかで』第2部で展開された「記号圏」の概念である。そこでは言語の複数性が、対象記述に先立って存在する「記号圏」によって基礎づけられた。〈生命圏（ヴェルナツキー）との類比で記号圏を特徴づければ、この記号空間は個々の言語の総和ではなく、個々の言語が存在し作動する条件であり、ある意味で、個々の言語に先行し、個々の言語とたえず相互作用しているのだ、ということが明らかとなる〉[250]。これについてアレクサンドル・ピャチゴルスキーは、対象を記述する方法であったものが「実在化」「自然化」されていると批判する。¹¹ エレーナ・グリゴリーエヴァによれば、「記号圏」の概念が示唆するところは、〈自然は多数の言語によってすでに「書きとられて」おり、それが状況の対話性を保証している。人間はその状況を意識的に利用するだけだ〉¹² ということである。

もっとも、世界の多言語性を言祝ぐロトマンに対し、リポヴェツキーはそれを「存在論的危機」と捉えている。クーリツィンの場合、〈ポストモダニズムの到来によって、「文化」はもはや「世界」を反映しなくなったが、しかし「世界」は、なお依然として、「文化」のそとに存在している〉¹³ と中村唯史がその主張をまとめているように、記述する言語（「文化」）と記述される現実（「世界」）という二元性がいまだ担保されていることで、一定の楽天性がみられた。一方、メタ・レベルとオブジェクト・レベルを一元化する——現

¹⁰ Там же. С. 13, 21. クーリツィンも、たとえばそのポストモダン宣言「ポストモダニズム：新たな原始文化」で、テキストと世界の不可分性をポストモダンの条件とするが、それは〈「テキスト」と「世界」がたがいの内部に存在する〉ようなイメージであり、根本的には両者の区別は廃棄されていないように思われる。Курицын В. Постмодернизм: новая первобытная культура // Новый мир. 1992, № 2. С. 226.

¹¹ Пятигорский А.М. Заметки из 90-х о семиотике 60-х годов // Неклюдов С.Ю. (сост.) Московско-тартуская семиотическая школа. История, воспоминания, размышления. М., 1998. С. 154.

¹² Григорьева Е. Символ, модель и мимесис по Лотману // Обаткин Г.В., Песонен П. (ред.) История и повествование: Сборник статей. М., 2006. С. 44. この点について詳しくは以下の拙論を参照。「ユーリー・ロトマンの文化記号論における「ロシア」の複数性と単数性」『ロシア語ロシア文学研究』第43号、2011年、35-37頁。

¹³ 中村唯史「「ロシア・ポストモダニズム」におけるロトマンの影」『早稲田文学』2001年9月号、44頁。このような「世界」（現実）と「文化」（言語・記号）の区別を、中村はロトマンの記号圏論にさかのぼらせるが、ロトマンの記号圏論には、世界は観察者に先立ちあらかじめ潜在的に言語化されているというモメントが強いと筆者は考えている。

実がテキストと化するのか、テキストが現実と化するのかという違いはあれ——エプシュテインとリポヴェツキーにとって、ポストモダンの事態は解決を要する「問題」だ。エプシュテインは失われた「現実」に対する、リポヴェツキーは失われた世界の「まとめり（全一性）」に対する、深刻な欠如感をそれぞれ問うている。

2. カオスの二つの顔

ポストモダン理解におけるこうした差異は、ロトマンとポストモダン理論に共通する、もうひとつの理系の言説——カオス理論——への関心にも表れている。ペレストロイカからソ連終焉へと至る晩年、ロトマンは歴史における偶然性や予測不可能性を盛んに論じた。観測理論に言及したのと同じ『思考する諸世界のなかで』第3部で、彼はプリゴジンとスタンジェールの『混沌からの秩序』を参照し、次のようにいう。

こうして偶然的なものと法則的なものは相容れない観念であることをやめ、同一の対象の二つのありうる状態となる。決定論的な場を運動するときには線形的発展の一点として現れる対象が、ゆらぎの空間に入ると、偶然性をともなう潜在的な諸可能性の連続体となり、起動装置として現れる。[349]

混沌から秩序が生じるというプリゴジンの散逸構造論をロトマンは、歴史における主意論と決定論を調停するものと受けとめた。〈分岐点で作動しはじめるのは偶然性のメカニズムだけでなく、意識的選択のメカニズムもそうなのである〉[350]といわれるように、偶然性は複数の可能性を人間にもたらすことで、主体的選択を迫るものと捉えられている。¹⁴ ロトマンの脳裏には当然、長い「決定論的」時代が続いたあとで、ソ連について「ゆらぎ」が訪れたという思いがあっただろう。

ロシア・ポストモダン論がカオス理論に向けた関心も、この「混沌からの秩序」という発想に集約される。アレクサンドル・ゲニスエッセイ「タマネギとキャベツ」(1994)で、ボードリヤールを参照しつつ、社会主義リアリズムは〈現実の欠如の隠蔽〉を目的としたと述べる。〈共産主義は秩序にとりつかれていた。自分は秩序ある存在の力であり、混沌の大洋を徐々に「侵食」し、秩序の群島をつくりだすのだとみなしていた〉。その意味で、〈ソヴィエト形而上学の最終的ユートピアたる秩序は、混沌と対立している〉。ゲニスはプリゴジンやロトマンを引用し、混沌は秩序の対立物ではなくパートナーたりうるのだと主張し、〈虚偽的存在〔混沌〕の層を一枚一枚剥がしてゆけば芯＝意味〔秩序〕に辿

¹⁴ この点について詳しくは以下の拙論を参照。「後期ソヴィエトにおける「生の構築」：ユーリー・ロトマンの演劇的文化論の社会史的考察」『スラヴ研究』第59号、2012年、18-21頁。

りつける」というソヴィエトの「キャベツ型パラダイム」に対し、〈先行する文化にとっては破滅的であった空虚〔混沌〕の上に文化〔秩序〕が築かれる〉¹⁵ という、中心に何もない「タマネギ型パラダイム」を提唱する。

このように、ゲニス「現実の欠如」や「空虚」をもって「混沌」と呼んでいる。前者について、彼の説明を引こう。

〔人間が〕周囲の世界を開拓していく過程で、手つかずの自然のみならず、手つかずの現実も消失する。原初の本来的な、人間によって変容させられていない「なまの」現実、文化による意図的操作の犠牲になった。〔…〕

〔…〕大衆社会とそのコミュニケーションの発達が引き起こした現実の危機は普遍的なものだが、ロシアではとりわけラディカルな変革を導いた。ロシアでは現実の不足が、西側よりも強く感じられる。¹⁶

「本来的な」「なまの」現実といった言い回しはナイーヴに響きかねないが、そのようなものはそもそも存在しなかったのだろうとゲニスは留保してもいる。ゲニスと同じくボードリヤールを参照してエプシュテインは、社会主義リアリズム、ひいてはピョートル大帝以来のロシア文化において、記号の指示対象＝現実が欠如しているという「空虚」について論じていた。ともに想定されているのは、ラディカルな変革によって以前の（「本来的な」）社会が破壊され、しかし変革の理想（社会主義リアリズムが描くような）からもかけ離れた近代ロシアの姿である。貝澤哉が指摘しているように、このような「空虚」とロシア特殊論との結びつきは、ロシア・ポストモダン論の周辺で広くみられた。¹⁷

だが、ゲニスがここで参照しているカオス理論の文脈に戻れば、ロトマンによるその参照の仕方とは隔たりがある。まず、ロトマンにとって重要だったのは、決定論的にみえる歴史の流れのなかに、複数の可能性をもつ「ゆらぎ」の瞬間、人間の「意識的選択」が問われる瞬間を救い出すことだった。『文化と爆発』では、決定論的歴史はあくまで事後的に形成されるものと強調されている。〈過去から未来を眺めるときには、われわれは現在を、一連の等しい確率の可能性の束とみなす。われわれが過去を眺めるときには、実現されたことが事実という地位を得て、われわれはそれが唯一可能なことだったようにみなしがちだ〉[110]。混沌＝「ゆらぎ」は事後的な回顧によって、やすやすと秩序化＝決定

¹⁵ *Генис А. Иван Петрович умер. Статьи и расследования. М., 1999. С. 129, 130, 131, 135, 136.*

¹⁶ Там же. С. 130.

¹⁷ 貝澤哉「ポストモダニズムとユートピア／アンチユートピア：現代ロシアにおける「近代」の超克」塩川伸明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界 3：記憶とユートピア』東京大学出版会、2012年、77-98頁。

論化されてしまう。〈いかなる現実的状况も […] 可能性の総和をすべて尽くすことはできない […] 芸術は人間を自由の世界へと運び、それにより人間が行いうる諸可能性を明らかにする〉[131] と芸術についていわれるように、「諸可能性の連続体」たる「ゆらぎ」は自由として価値づけられた。それに対してゲニスは、「本来的」秩序を失くした混沌をいかなるかたちで秩序（文化）に導くか腐心する。時事的な観点からいえば、ロトマンのテキストが書かれたペレストロイカ期と、ゲニスのテキストが書かれたエリツイン期の雰囲気の違いが窺えるだろう。

二人のもうひとつの隔たりは、「混沌」の内容にある。『文化と爆発』でロトマンは、偶然性や予測不可能性をもたらす「爆発」について詳述した。〈偶然性とは、なんらかの他のシステムからの出来事の干渉である〉[110]、〈たがいに無縁な諸言語の衝突の瞬間として、爆発を解釈できる〉[118] といわれるように、ある決定論的システムのゆらぎは、他のシステムとの「対話」「翻訳」によって生じる。実際のところロトマンは、「混沌」という言葉をほとんど使っていない。彼にとって「ゆらぎ」は、「混沌」という持続的状態より瞬間的な「爆発」と捉えられるべきものであり、その意味でロトマンは、あくまで決定論的システムをベースに思考している。

ある意味で文化というものを、外的な世界のなかに浸っており、その世界を引き込んで、おのれの言語構造にしたがいつくりかえ（組織して）排出する構造として思い描けるだろう。しかし、文化が混沌とみなすこの外部世界も、実際には組織されている。その言語の文化にとっては未知のなんらかの規則にしたがって、組織化されているのだ。[117-118]

ゲニスが（再）秩序化について腐心する「混沌」はまさに、文化＝秩序の外部世界（その対立物であれパートナーであれ）だった。それに対して『文化と爆発』のロトマンは、言語の外部とはある特定の言語にとっての外部にすぎないとくりかえす。

「現実」という語は二つの異なる事象をカバーする。ひとつにはそれは、カントの定義という現象としての現実、すなわち文化と相関し、対立したり合一したりする現実である。もうひとつの、物自体（カントの用語法でいう）としての意味では、決定的に文化の域外にある空間として現実を語るができる。しかしながら、もしわれわれの世界の中心に、孤立した単一の「自我」ではなく、たがいに相関した多数の「自我」が複雑に組織する空間を据えるならば、こうした定義や用語の体系は一変する。

[...] 翻訳可能なものと不可能なものとの相関はきわめて複雑であり、域外の空間へと突破する可能性が生み出される。このような機能を、爆発の瞬間もまた果たすのであり、記号論的な層に窓を開きうるかのようだ。[30]

このように、ロトマンのカオス理論の理解において決定論的秩序と対をなすのは、秩序の外部（秩序なき混沌であれ別の秩序であれ）ではなく、別の秩序との「対話」の瞬間＝爆発である。

エプシュテインと同じくボードリヤールのなポストモダン理解に立つゲニスに対し、リオタールの理解を重視するリポヴェツキーは、よりロトマンに近いたちで「混沌」を解釈している。著書『ロシアのポストモダニズム』（1997）の導入部でリポヴェツキーはカオス理論を参照し、〈文化にとって基本的なカオスとコスモスの対立を克服し、この〔二つの〕一般概念の妥協の模索へと創造的衝動を向けなおそうという、芸術・哲学上の原理的な試みをポストモダニズムは具現している〉と述べる。それに先立ち問題化されているのが、ポストモダンにおいて「対話」、多様な言語の並列が顕著となったことだ。〈対話主義をポストモダン詩学の部分的要素のひとつとみなすことはできない。というのも対話主義は、ポストモダンの間テキスト性や遊戯的詩学といった特徴を規定する構造的骨組みであり、別の言い方をすれば、ポストモダンの芸術パラダイムのドミナントとして現れるからだ〉、〈だがそれは、芸術的全一性というものが、ポストモダン芸術のパラダイムとは原則として相容れないことを意味するのだろうか〉。¹⁸ 混沌は「現実の欠如」や「空虚」ではなく、多言語の「対話」として想定されている。

リポヴェツキーのカオス理論の理解はこの点でロトマンに近いが、一見して明らかなように、ゲニスにとってと同じく「混沌」は言祝ぐものというより問題であり、そこからどう秩序を生み出すかが検討されている。リポヴェツキーと同様、「対話」をポストモダンの中核とみなしていたクーリツィンも、90年代ロシアの間テキスト的評論（分析対象にさまざまな間テキスト的連想を見出す類の）をレビューして次のように問う。〈間テキスト的分析では、いったいどのような〔間テキスト的〕結びつきや交差に限定すべきなのか、こうした探究をどこでいかに終えるべきか、連想の流れをどこで断つべきなのか〉。〈間テキストのプロセスに対して十分外的ななんらかの課題。例えばイデオロギー的、あるいは学問的な課題〉によって分析者の連想を制限するという解決法に対してクーリツィンは、〈間テキスト的結びつきの容量は〔カントの〕「美的な合目的性」に基づき決められるべきだ〉¹⁹ と主張する。

「混沌からの秩序」の契機として、リポヴェツキーが注目するものは二つある。ひとつは死だ。〈ビートフや〔ベネディクト・〕エロフェーエフ、ソコロフの芸術世界で死のイ

¹⁸ Липовецкий. Русский постмодернизм. С. 39-40, 32, 33. 同書の英語版『ロシアのポストモダン・フィクション』（1999, 内容は一部異なる）の副題は「混沌との対話」である。

¹⁹ Курицын. Русский литературный постмодерн. С. 206, 206, 207.

メージが占める特別な地位は、連続性と離散性、断片性と一体性のあいだに特殊な関係をつくりだす。そしてその関係は、芸術的全一性の形成において決定的役割を果たすのだ。

²⁰ その際にリポヴェツキーが引用するのが、ロトマン最晩年のエッセイ「プロットの問題としての死」（1992）である。死は生を断絶させるものでありながら、生に意味的まとまりを与えもする、というのがその趣旨だ。²¹

もうひとつは自由である。

ソローキンにおける混沌の神話が意味するのは〔…〕どんな意味のヒエラルキーも、どんな価値の秩序も、存在論的無意味という完全な混沌の外皮にすぎないということだ。だが彼は、混沌から生まれる秩序、あるいは混沌の内部で形成される秩序、言説的秩序が無価値にされるようには混沌によって無価値にされることのない秩序を見出さないのだろうか。

混沌から生まれ混沌と共存するそのような秩序とは、おそらく自由である。²²

先にみたように、ロトマンにとって「爆発」は自由を体現するものだった。リポヴェツキーは自由の価値への信頼を、西側とは異なるロシア・ポストモダンの特徴としている。60年代以降のソ連で「大きな物語」が崩壊していったなかでも、〈解放や自由主義の価値自体は、西側の文明とは違って決してインフレを起こさなかった〔…〕とりわけ、ポストモダニズムをその胎内で進化させた 70-80年代文化のダイナミクスにおいては、「価値観の中心」にそれが感じられる〉。²³ 「爆発」が起これば怪我人も死者も出るだろう。ロトマンが語ることのなかった混沌のそうした否定面と、自由という肯定的価値を結びつけ、そこから生じる秩序の可能性をリポヴェツキーは見出そうとする。

『ロシアのポストモダニズム』終章は、「ロシア・ポストモダニズムの特殊性」と題されている。〈さまざまな文化システムの価値的コンテクストが会おう場をつくりだすこと——すなわち「対話」——にふたたびポストモダンの中核が見出されるが、ただしロシアのそれにおいては、〈この出会いの特徴は、芸術家のもとに現れるポリログのなかに、「自己」の言葉がないということだ——すべての言葉は「他者」のものである〉。²⁴ 念頭におかれているのは、エプシュテインがロシア・ポストモダンの淵源と主張したのと同じ、ラディカルな変革により現実とかけ離れた記号を蔓延させてきたロシアの近代史だ。実際

²⁰ Липовецкий. Русский постмодернизм. С. 203.

²¹ ロトマンは『文化と爆発』でも、「終わり」について同様の議論をしている。〈終わりをもたないものは意味ももたない。意味づけは、非離散的空間の分節化と結びついている〉[137]。

²² Липовецкий. Русский постмодернизм. С. 272.

²³ Там же. С. 112.

²⁴ Там же. С. 304.

ここでリポヴェツキーは、エプシュテインの「トランスカルチャー」という構想を参照する。この構想によってエプシュテインは、多文化主義という、本論文で称するところのリオタールのポストモダンの現象に応答した。西側の多文化主義は、〈相対主義の強い要素を含み、統合という概念自体を無視しさらには掘り崩す傾向があった〉。一方、「すべての言葉は『他者』のもの」であるロシアでは、それぞれの文化がばらばらに自足するのではなく、自己に対する「外在性」が促され、自己を超えて統合へ向かう「トランスカルチャー」が生まれたという。それは全体主義とは違い、〈「統合による解放」をむしろ目指す。その諸構成要素を支配するのではなく、真により完全な存在へ統合することで、それぞれを生来の拘束から自由にするのだ〉。²⁵

エプシュテインによるこのような「混沌からの秩序」の構想を、リポヴェツキーはユートピア的に過ぎると批判する。「自由」だけに光があてられ、「死」が見過ごされているのだ。

このように死は、ロシア・ポストモダニズムの統合シンボルとなる。仮にそれが「トランスカルチャー」だとすれば、ある文化的言語から別のものへの翻訳の普遍的戦略として死が現れるようなものであり、〔…二つの言語は〕たがいに存在論的混沌を前にした弱さのうちにあり、生を秩序立て死を克服しようとする試みの無力さのうちにある。²⁶

秩序の不可能性をとおした統合という、リポヴェツキーが「リゾーム的」とも呼ぶこの「混沌からの秩序」の原理は、エプシュテインと大きく異なるわけではない。リポヴェツキーはロシア・ポストモダン文学における「死」を、とりわけバルトのいう「作者の死」に結びつけて解釈している。〈端的に言えば、ロシア・ポストモダニズムの進化の論理は、一方では「今日の文化の基本的パトスは自由であるという理解」（プリゴフ）と、他方ではその自由を達成させるものとしての「作者の死」（バルト）や「主体の脱中心化」（フーコー）との対立を前面に押し出す〉。²⁷ 主体の解体としての「死」は、エプシュテインのいう自己に対する「外在性」に近いだろう。リポヴェツキーが反発しているのはおそらく、死＝外在性という否定的運動が、「真により完全な存在」へと実体化されてしまうこと、主体の解体という現象自体が特定の主体の基盤となることだ。それはエプシュテインにおいて、ロシアという場所に具現されるのであり、「空虚」を肯定的価値へと反転させるロ

²⁵ Mikhail N. Epstein, *After the Future: the Paradoxes of Postmodernism & Contemporary Russian Culture*, Anesa Miller-Pogacar, trans. (Amherst: the University of Massachusetts Press, 1995), pp. 280, 290.

²⁶ *Липовецкий*. Русский постмодернизм. С. 306.

²⁷ Там же. С. 274.

シア・メシアニズムの（意図的な）再演になってしまう。²⁸ 多言語的混沌を統合する場の実体化は、じつはロトマンの記号圏概念にもあてはまることであり、彼が『文化と爆発』で、持続的状態を含意する「混沌」の語を避け「爆発」の瞬間に議論を集中したことは、その点で示唆的である。もともとリボヴェツキーの「死」にしても、ポストモダンという西側で生まれた概念をロシアに適応するなかで、その特殊性を求めて見出されたのである以上、場所の名のもとに実体化される可能性を免れてはいない。2000年代に変貌を遂げたロシア・ポストモダン論におけるロトマンの参照では、そのような実体化・場所化が顕著になる。

3. 「爆発」の場所化

ロシア・ポストモダンの文学や芸術の多くはソ連を題材とするものであり、ソ連が過去となるとともに方向転換を迫られた。いずれも2000年にまとめられたエプシュテインの『ロシアのポストモダン』とクーリツィンの『ロシアのポストモダン文学』は、末尾でポストモダンの終わりを告げている。エプシュテインの「トランスカルチャー」も、ポストモダンの多文化主義の次なる段階として構想されており、早くも〈1989年のベルリンの壁崩壊とともに始まったように思える現在の時代は、「ポスト」というより「プロト」という観点から練りなおされるべきだ〉²⁹と述べていた。

エプシュテインは2006年に9・11事件を振りかえったエッセイで、トランスカルチャーを再論した。自足したポストモダンの時代はアメリカでも9・11によって終わり、〈爆破事件を語るうえでは、テロリストの捜索だけでなく、まったく別の規模のことも念頭におかねばならない——現代文明全体の爆発的スタイルのことである。野蛮人がわれわれを爆発させるというだけでなく、文明側のわれわれ自身がすでに爆発状態にあるのだ〉。ロトマンがここで直接参照されるわけではないが、「爆発」はロトマン的に「自由」として価値づけられ、トランスカルチャーと結びつく。〈さまざまな文化やそれぞれの文化内部の空間においても、爆発の形象が顕著になっている。[...] ジェンダー、民族、人種、性的志向、階級などだけではない。実際われわれはみな、五つ六つどころではなく数多の牢獄、「自然」に囚われている——しかしそれに劣らず自由もあるのだ [...] /このように、文化的爆発の領域が生まれ拡大している。これがすなわち、マルチカルチャーに取っ

²⁸ ロシアのナショナル・アイデンティティのこうした構造を指摘したものとして、以下は強い影響力をもった。Гройс Б. Россия как подсознание Запада // Утопия и обмен. М., 1993. С. 245-259. 邦訳は、ボリス・グロイス (楯岡求美訳)「西欧の下意識としてのロシア」『現代思想』1997年4月号, 103-115頁。

²⁹ Epstein, *After the Future*, p. 280.

て代わるトランスカルチャーである)。³⁰

「爆発」については同年の著書『言葉と沈黙』の終章と結論（初出は1999年）でも触れられ、ロトマンが基本的参照元となった。議論の中心は、ロトマンがボリス・ウスペンスキーとの共著論文「ロシア文化のダイナミクスにおける二項的モデルの役割（18世紀末まで）」（1977）で唱え、『文化と爆発』の末尾でくりかえされた、ロシア文化＝二項的／西欧文化＝三項的という図式である。〈カトリック的な西欧のキリスト教では、死後の世界は天国・煉獄・地獄という三つの空間に分けられる。それに対応して現世の生活も、絶対に罪あるもの、絶対に聖なるもの、中立的なものという三つのタイプの行動を許容すると考えられる〔…〕この中立圏が、将来のシステムが発展するための構造的備蓄となるのだ〉。それに対してロシアでは、〈二元性と、中立的価値圏の欠如の結果、新しいものは〔古いものの〕続きではなく、すべての終末論的交替だと考えられた〉。³¹『文化と爆発』ではこれが「爆発」の観点から語りなおされる。〈二項的システムでは、爆発は日常生活のすべての層を捉える〉[142]が、三項的な〈西欧タイプの文明においては〔…〕爆発は文化の層の一部を爆破するだけであり、非常に重要な部分が爆破されるにせよ、それで歴史的連環が断たれはしない〉[144]。『文化と爆発』という作品の時事性を明らかにする有名な一節がそれに続く。〈ここで述べたことは、旧ソ連領で現在進行中の出来事に直接関係している。われわれが検討してきた問題に照らせば、われわれが目撃しているプロセスは、二項的システムから三項的なものへの転換として記述できるのだ〉[145-146]。ロシアと西欧との胡乱な対照のもつ意義は、ソ連終焉前後の時事的文脈のなかで理解されねばならない。³²〈爆発へ向かう思考から進化的意識への移行は、現在、特別な意義を帯びている〔…〕現実には爆発がなくなることはありえないが、停滞か破局かという宿命的選択を克服することが問題なのだ〉[146]。

ここで、「爆発」をめぐる評価に若干の混乱が生じていることに注意しよう。先述したようにロトマンは「爆発」を、人間に複数の可能性をもたらす「ゆらぎ」の瞬間、自由として価値づけていた。一方、『文化と爆発』末尾のこのくだりでは、二項的システムにも三項的システムにも「爆発」があるとしたうえで、それがシステム全体の破壊に至る前者と一部の破壊にとどまる後者を区別し、前者を「爆発へ向かう思考」、後者を「進化的意識」と呼んで、後者を高く評価している。これは矛盾というほどではなく、「爆発」は基本的に望ましいという前提でその実現の仕方に優劣をつけているわけだが、エプシュティ

³⁰ Эпштейн М. Нулевой цикл столетия. Эксплозив – взрывной стиль 2000-х // Звезда. 2006, № 2. С. 214, 216.

³¹ Лотман Ю.М. История и типология русской культуры. СПб., 2002. С. 89, 90.

³² この点については以下を参照。桑野隆『バフチンと全体主義：20世紀ロシアの文化と権力』東京大学出版会、2003年、第10章。

ンは『言葉と沈黙』でこの「矛盾」を正そうとする。西欧の三項的システムと比較して、ロシアの二項的システム、ラディカルな「爆発」のもつ価値が主張されるのだ。エプシュテインも、三項的システム自体の望ましさ、「中立圏」の導入を肯いはずするのだが、西欧（アメリカを含む西側）的なそれには問題があるという。

自然法則の領域が広がるにつれて、西欧文化は周辺や極端を避けて中間帯へと移り、「聖なるものでも罪あるものでもない」、高次でも低次でもない地帯へ移動した。まさしく、あらゆる対立のこうした加速度的な中立化に向かう西欧文化の発展が、最後のポストモダン時代を導くのであり、その主要な志向は対立を差異に代えることだと規定できよう。

もしわれわれが、相対主義に基づいてあらゆる価値の世界を平準化し、果てのない無限にまだらな差異の織物として思い描くと、次に超越的思考や人間存在全般を喚起するものとなるのは、この織物を引き裂くことだろう。だがその向こうにはもはや《無》それ自体のほか何もなく、それゆえあらゆる現実世界は幻影とシミュラクルの平面に還元される。³³

以前のエプシュテインは、ロシアこそシミュラクルの王国だと主張していたわけだし、『言葉と沈黙』所収のコンセプチュアリズム論などにはその名残も窺える。〈言葉のむこうには何もない。われわれの注意が言葉から滑り落ち、言葉を抹消するためだけに、言葉は唱えられ記される〉、〈ことばが貶められ意味が俗化されるのは、別の、沈黙している現実、それにとっては言葉などなくありえもしない現実を指し示すための方法である〉。この章の元になっているのは、コンセプチュアリズムと東方正教会の否定神学の結びつきを指摘した1989年発表の論文であり、³⁴ エプシュテインが90年代に展開した、近代ロシア文化のシミュラクル性という主張が（ポストモダンの用語は使わずに）すでに披露されていた。しかし『言葉と沈黙』では、加筆を経て、西欧の肯定的な神学と東方の否定神学という〈二つの偉大な宗教システムのあいだにあるロシア独自の道〉が強調される。西欧的「差異」への批判は、先述した多文化主義への批判と同根だ。〈二つの項がそれ自身の力の源をもっており、第三項から独立して作用する場合にのみ、第三項は境界上の出来事が存在する場所となりうる〉、〈二元的モデルと爆発的プロセスの経験こそ、現代のひどく平準化されて中間的な西側文化の「ポストヒストリー」状況に対し、ロシア文化がなす貴重な貢献たりうるのだ〉。³⁵ マクシム・ワルドスタインはロトマンとウスペンスキーの「ロシア

³³ Эпштейн М.Н. Слово и молчание. Метафизика русской литературы. М., 2006. С. 487, 495.

³⁴ Эпштейн М. Поставангард: сопоставление взглядов // Новый мир. 1989, № 12. С. 222-235.

³⁵ Там же. С. 324, 325, 339, 545, 546.

＝二項的」論について、ロシア史を「新しいもの」と「古いもの」の反転の連続と捉える構築主義的分析が、ロシアに西欧とは異なる不変の性質を見出す本質主義と結びついていると指摘する。³⁶ 本質（「自然」）からの自由をロシアの本質だとするエプシュテインの主張には、同様の自家撞着がより極端な——確信犯的ともいいたくなる——かたちで窺えるだろう。³⁷

多くの論者がロシア・ポストモダンを過去に押しやるのに対し、リポヴェツキーは2008年の著書『パラロジ』で、その継承を検討している。そこで前著に欠けていた視点として導入されるのが、ロシアの文学的伝統の特殊性である。〈ロシアの批評家のほとんどが、西側のポストモダニストの学問的・芸術的著作において脱構築されたヨーロッパのロゴス中心主義と、ロシアのポストモダニズムにおいて脱構築された文学中心主義を嬉々として同一視した。しかし私の見方では、そのような同一視は深刻な誤りなのだ〉。前著が主題にした混沌についても、〈I・プリゴジンとその後継者たちの完全に合理主義的な概念を隠喩化し、隠喩的に拡大解釈することで、この概念が疑いようもなく属しているロゴス中心主義的パラダイムから「抜き出して」いた〉³⁸と反省される。

文学中心主義はポストモダンと同じく、90年代のロシア論壇を賑わせたテーマであった。³⁹ シミュラークルを軸とするエプシュテインのロシア・ポストモダン論は、テキストが現実を代理したという基本的主張において、文学中心主義と重なっている。もっともリポヴェツキーは、資本主義社会に基づくシミュラークル論への過剰な接近には依然慎重だ。文学中心主義の理解に関し、彼はミハイル・ベルグの『文学統治』（2000）に特に依拠するが、近代ロシア文学が宗教の社会的機能を受け継いだというその趣旨は、ロトマンが80年代以降の一連の著作（「文化史的コンテクストにおける文学的伝記」（1986）、「啓蒙主義的擬古主義者」（1986）、『カラムジンの創造』（1987）、「ピョートル後の時代のロシア文学とキリスト教的伝統」（1991））で展開した主張の延長である。さらにリポヴェツキーは、二項的システムから三項的システムへという、ソ連終焉に関するロトマンの見立てをロシア・ポストモダンにあてはめる。

³⁶ Maxim Waldstein, *The Soviet Empire of Signs: A History of the Tartu School of Semiotics* (Saarbrücken: Verlag Dr. Müller, 2008), pp. 151-152.

³⁷ エプシュテインの英訳者 A・ミラー＝ポギャカーは、彼をフォルマリズムからバフチン、記号論に至る伝統と、アヴェリンツェフやガチェフによる民族文化論との交点に位置づけている。Anesa Miller-Pogacar, "Transculture and Culturology: Post-structuralist Theory in Late and Post-Soviet Russia," Ph.D. dissertation, University of Kansas, 1993, ch. 5.

³⁸ Литовецкий М. Паралогии. Трансформации (пост)модернистского дискурса в культуре 1920 – 2000-х годов. М., 2008. С. 24, 37.

³⁹ 詳しくは、桑野『バフチンと全体主義』、第11章。

ロシア・ポストモダニストの作品においては実際に、二極的対立項の対話に第三の中立的なゾーンが作りだされるが、それは二項対立を解消するのではなく呑み込むのであり、爆発——ロシア文化にとって伝統的な文化的ダイナミクスのメカニズム——をいわば恒常的体制へと移行させる。⁴⁰

この主張はエプシュテインときわめて近い。西側のポストモダンが二項対立の解消を目指す（脱構築を思い浮かべればよい）のに対し、文学に宗教的超越性を付与するロシアでは、〈対立項をつなげたり、その内的な結びつきや類似を明らかにしても、両者の対立性は解消されず、非合理的な——純粋な意味で宗教的な——衝突が保たれてしまう。[…]ロシアのポストモダニズムでは、対立（カテゴリーやディスコースなどの）が抹消されるのではなく増殖し、優位に立とうと闘争をくりひろげつづける。⁴¹つまりはエプシュテインが批判していたような、差異の戯れとしてのポストモダンではなく、暴力的ともなる対立を増殖させるポストモダンということだ。

ただしリポヴェツキーは、エプシュテインに顕著だったメシアニズム的トーンとは無縁であり、ロシアに対する見方は90年代と同じく明るいものではない。たとえば、〈コンセプチュアリズムは《絶対》の表現不可能性を強調することで、否定神学的な否定の方法で《絶対》を逆説的に指し示しているという意見は、私の考えでは、絶対や真実というカテゴリーに対する根源的な失望と恐怖を決定的に歪めている〉、〈ロシアのコンセプチュアリストには全般的に、空虚は死と混沌の顕現であると同時に自由の源でもあるという、アンビヴァレントな態度がより特徴的だ〉。前著における「死」を受けた「失望と恐怖」は、〈近代化とその結果に対する恐怖〉⁴²に帰せられる。遅れて近代化を開始したロシア・ソ連では、前近代的な絶対権力下に近代化が遂行されたのであり、リポヴェツキーはそれを「復古的近代化」と呼ぶ。このようにロシア・ポストモダンを特殊化し、それを西欧とは異なる近代史にさかのぼらせる点で、リポヴェツキーはエプシュテインと変わらない。違うのは、ロシア・ポストモダンの特殊性を「西側文化に対しロシア文化がなす貴重な貢献」として打ち出す（戦略的）本質主義、すなわちポストモダンの否定的運動性＝「爆発」の実体化をめぐる是非である。

『パラロジ』後半で展開される、2000年代のロシア文化の保守化とポストモダンと

⁴⁰ Липовецкий. Паралогии. С. 66. なお、リポヴェツキーの前著の英語版（1999）には、ロトマン・ウスペンスキー論文やエプシュテインに依拠してこのくだりと同様のことを主張する、ロシア語版には見あたらない箇所がすでにある。Mark Lipovetsky, *Russian Postmodernist Fiction: Dialogue with Chaos* (Armonk and London: M.E. Sharpe, 1999), pp. 32-33. そこで引用されているエプシュテインの口頭発表原稿（1997）が、『言葉と沈黙』終章の原型のようだ。

⁴¹ Там же. С. 52-53.

⁴² Там же. С. 249, 248, XIV.

の関係の分析にはそれが明確だ。市場主義の浸透によるポストモダン作家の大衆化、政治的 PR におけるポストモダンの手法の利用などに加えてリポヴェツキーは、社会主義リアリズム的なストーリーやモチーフを、ポストモダンの折衷主義やアイロニーとともに構成する文学・映画に注目し「ポスト・ソッツ」と命名する。〈これらの作品の作者は、自分が利用する象徴的言語からアイロニカルに身をかわそうとすると同時に、それらの言語を復活させようとする〉。ソ連のモチーフはアイロニーによってそのイデオロギー的背景をいったん拭い去られ、ときにはハリウッドなど西側文化のモチーフとも混ぜ合わされるのだが、それは〈観客／読者が、一方では主人公とイデオロギー的に直接同一化してしまわないようにしつつ […] 他方では主人公と共体験するのみならず、儀式的出来事に加わるかのように——非合理的な、疑似的に非イデオロギー化されたレベルで——ストーリーに取り込まれるようにする、特殊な形態の文化的コミュニケーション〉⁴³ なのだ。「象徴的言語」からの自由が集団的アイデンティティをシミュラークルとして再構成し、それへのアイロニカルな同一化を導くことが分析されるのだが、エプシュテインの「トランスカルチャー」はまさにその高度な戦略にみえてくる。

現代ロシア文化のナショナリズムに関してリポヴェツキーがとりわけ依拠するのが、レフ・グトコフによる「ネガティヴ・アイデンティティ」という概念である。〈ロシア人の団結は、あれこれの共同事業の基礎をなすポジティブな観念ではなく […] 排除や否定、境界設定による団結に基づく〉。⁴⁴ 〈集団的アイデンティティの〔ポストモダンの〕解体の是認を〔ソ連的〕「われわれ」への切実なノスタルジーと縊り合わせる〉⁴⁵ ポスト・ソッツにとって、ポジティブな自己規定抜きに、他者への対抗によって成り立つこの「われわれ」はもってこいだ。

ここでいま一度ロトマンの「爆発」を振りかえれば、それはソ連の「決定論的」システムへの対抗として構想されていた。彼が複数システムの「対話」「翻訳」にこだわったのも、ソ連における単一システムの支配という前提があったからだろう。たとえば『象徴交換と死』でボードリヤールが、記号論を「コードの複数性」によって豊かにしようとする

⁴³ Там же. С. 496-497, 497. アレクセイ・ユルチャクの『失くなるまですべては永遠だった』(2006)以来、後期ソ連～現代ロシアにおけるシニシズムやアイロニーが注目を集めており、リポヴェツキーが英語で出した『シニカル理性の魅惑：ソヴィエトとポスト・ソヴィエト文化におけるトリックスターの変形』(2011)はこの問題に捧げられている。彼が「ポスト・ソッツ」の代表作のひとつとみなす、アレクセイ・バラバーノフ監督『チェチェン・ウォー』(2002)のシニシズムには以下の拙論で簡単に触れたが、この問題について詳しくは別稿を期したい。「真実は人の数だけある？：ロシア・メディアのなかのチェチェン戦争」野中進、三浦清美、ヴァレリー・グレチュコ、井上まどか編『ロシア文化の方舟：ソ連崩壊から二〇年』東洋書店、2011年、283-290頁。

⁴⁴ Гудков Л. Негативная идентичность. Статьи 1997-2002. М., 2004. С. 156-157.

⁴⁵ Липовецкий. Паралогии. С. 741.

志向を批判し、記号論的システムそのものを自壊させる「詩的实践」を称えたのとは対照的である。⁴⁶ 二項的な「爆発へ向かう思考」と三項的な「進化的意識」を比べ、後者が望ましいとしたロトマンだが、そもそも彼の「爆発」概念自体、決定論的秩序への対抗という二項対立的な枠組に基づいているのだ。二項的システムにも三項的システムにも「爆発」があるといいつつ、前者と「爆発」の結びつきをより強調する「混乱」も、それと関係している。「爆発」が実現する自由とは、「～からの自由」、つまりバーリンのいう消極的自由であって、ポジティブな具体的観念を軸とする積極的自由ではない。このような対抗的自由に関する問題意識が、三項的システムへの移行をロトマンが説くひとつの要因であったようにも思える。⁴⁷

ソ連という対抗すべき相手が消え去ってなお、エプシュテインやリポヴェツキーは、「爆発」を意義ある概念だと考える。対抗相手を失った「爆発」が、抵抗の原理から排除の原理に転じたのが「ネガティブ・アイデンティティ」だと考えれば、たしかに現状分析の道具として「爆発」は有効なのかもしれない。また、プーチン体制下の新たな抑圧を思えば、対抗原理としての「爆発」にもいまだ意味があるのかもしれない。外部の他者への対抗を梃に「われわれ」を立ち上げる「ネガティブ・アイデンティティ」に対し、おのれ自身の内部に他者を見出す「爆発的ハイブリッド」という現象が、ロシア・ポストモダンの新たなかたちだとリポヴェツキーは主張する。⁴⁸ だがそれ以上に、エプシュテインが『言葉と沈黙』の序文で、「大きな物語」からの自由を課題とする〈この本が、またひとつの大きな物語——自由という大きな物語——を打ち立てるものだと受けとられても、私は驚かない〉⁴⁹ と述べているように、「爆発」＝自由には、いまのロシア社会に欠如した求心的なポジティブな観念となることが期待されている。リポヴェツキーも前著で自由を、ロシア・ポストモダンの「大きな物語」であり、「混沌からの秩序」をもたらす契機のひとつとみなしていた。しかし、対抗的・否定的運動たる「爆発」をポジティブな観念に変えようとするとき、それはロシアに特殊的なものとして場所化されてしまう。右傾化した2000年代ロシアの社会と文壇にあって、⁵⁰ 「ネガティブ・アイデンティティ」によるのではな

⁴⁶ ジャン・ボードリヤール（今村仁司・塚原史訳）『象徴交換と死』ちくま学芸文庫、1992年、第6部。

⁴⁷ ロトマンが積極的自由を不可欠なものと考えていたことについては、前掲拙論「後期ソヴィエトにおける「生の構築」」、20-21頁。

⁴⁸ *Липовецкий. Паралогии. С. 516-527.*

⁴⁹ *Эпштейн. Слово и молчание. С. 18.*

⁵⁰ ロシアの文芸評論の右傾化について、リポヴェツキーは以下の共著論文で詳しく概観している。*Кукулин И., Липовецкий М. Постсоветская критика и новый статус литературы в России // Добренко Е., Тиханов Г. (ред.) История русской литературной критики: Советская и постсоветская эпохи. М., 2011. С. 635-722.*

い「ベターな」ナショナリズムを提唱するかにみえるポストモダニストたちの言説には、自由を集団組織の原理とする、いいかえれば、自由に基づく社会を構想することの困難が現れているのだ。

“Explosion” as National Identity: The Influence of Jury Lotman on Russian Postmodernist Theory

NORIMATSU Kyohei

This paper examines the influence of Jury Lotman (1922-93), the leader of Soviet semiotics, on Russian postmodernist theory in the 1990s and 2000s. In spite of their mutual indifference, Lotman and Western postmodernists share a common interest in quantum mechanics, especially the measurement problem and chaos theory. In terms of chaos theory, Lotman proposes the notion of “explosion” within a semiotic system, which is triggered by contact with another system. “Explosion” is defined as freedom from the determinant order, which readers at the time easily identified with the Soviet regime. This notion was revived by Russian postmodern theorists in the 2000s, when they attempted to define the specificity of Russian postmodernism (or Russian culture at large). The conflict between systems and the inclination towards freedom are regarded as national traits in disputable ways. Despite the repressive atmosphere in the Putin era, no monolithic “grand narrative” exists in contemporary Russia. In this situation, an “explosion,” which is supposed to liberate a person from a system, can paradoxically function to reconstruct Russia’s national identity. By analyzing Lotman’s influence, we can scrutinize the struggle of Russian postmodernists in applying Western theory to their national history and in conceptualizing freedom as the principle with which to organize society.